



ご卒業おめでとございます。

この度、初等教育学科の第一期生が卒業となりました。
先生方からたくさんのお言葉をいただいています。

北川 歳昭先生

初等教育学科学生の持味は、というところ、目標を見据えて地道に努力すること、面倒な辛い仕事でもみんな楽しんでやってみることに、困っている人がいると気楽に声をかけることができる仲間意識、教育保育の楽しさと難しさを知っている子ども好き集団、かな。一期生は、そんな就実初等の伝統の基礎を作ってくれたフロンティアでした。卒業、おめでとう！君たちはすでに就実初等のレジェンド。さらなる活躍を期待しています。

相原 久仁男先生

卒業おめでとう。卒業という日本語を耳にした時に英語の好きな人はgraduationという単語を思い浮かべるはず。私も英語好きの一人です。graduationも浮かんで来ますが、別の気になる、お気に入りの単語も同時に浮かんで来ます。それはcommencementです。こちらの単語の動詞形はcommence(始める、始まる、学位を受ける)。卒業は終わりではなく、新しい世界に向けての出発、何かの開始なのです。

以上の意味で卒業おめでとう。

赤坂 英二先生

みなさん、ご卒業おめでとう。初等教育学科、第一期生のみなさんの前途を祝し、次の言葉を贈ります。

心 いつまでも 美しく
技 いつまでも 勉学に励み
体 いつまでも お元気で

秋吉 博之先生

ご卒業おめでとうございます。大学で学んだことを生かして、社会で活躍されることを心から期待しています。卒業後に保育士や教師として、また社会人として学んでいくことは数多くあります。例えば、社会性を身につけること、先輩や同僚から学んでいくこと、自分の専門性を伸ばしていくことなどです。これらのことを社会で着実に身につけられることを願っています。そして卒業後に、大きく成長した皆さんと再会できる日を楽しみにしています。

河合 富美子先生

長所を見つけることのできる社会人にある研修会で、養護教諭として中学校に勤務しているMちゃんに37年ぶりに会った。私の顔を見るなりMちゃんは「保育園児だった幼い頃小さな声でしか返事のできない私にクラスの友達は、『聞こえないよ』と言ったとき、先生は『耳を澄ましてごらん聞こえるよ』とクラスのみんなに話してくれた。この時のことが今でも忘れられない」と言う。

私には全く記憶にないMちゃんの言葉に対し、あのとき大きな声で返事しようと伝えていたらと思いついた。無意識の言葉の中に、子どもの心を傷つけ

たり勇気づけたりすることがある。子どもには個性があり、得意とするものを持っている。弱いところを修正するよりも、得意とするものを見つけて伸ばすことが保育、教育する者の役目と思う。

門松 良子先生

ご卒業おめでとうございます。4月からは、いよいよ社会に出てみなさんの力を発揮することになりますね。これから様々な人との出会いがあると思います。いつも「一人ひとりを大切に!」ということをお忘れしないで、人のかかわりを大切にしたいと思えます。就実大学初等教育学科の1期生として、みなさんが活躍されることを期待しています。

古山 典子先生

初等を巣立ち、それぞれの道へ踏み出すみなさんへ。これから進む道でどんな困難が待ち受けているかはわかりません。でも…「何も咲かない寒い日は、下へ下へと根を伸ばせ」。努力は進むべき道を照らしてくれます。解決できないと思うような困難でも、もがいていけば事態は必ず動き始めます。失敗しても大丈夫。みんな失敗しながら生きています。好奇心と探究心を忘れず、自分に恥じない人生を歩んでください。

佐藤 和順先生

「サルも木から落ちる。でもまた登ればよい。」木から木へ、上手に移動する猿さへも、時には手を滑らせ地に落ちることがあるといひます。得手なことさへも、失敗が起こりうるのです。不得手なこと、苦手なことならなおさらです。猿が木から落ちる。でも、また登って次の木へと移動する。失敗した地点でとどまっていたら、その先の進歩・成長はありません。これから社会に出て多くの失敗を経験することでしょう。しかしまた挑戦すればよいのです。皆さんのご活躍を祈念しております。

竹中 伸夫先生

ご卒業おめでとうございます。早いもので、入学から4年という月日が経ちました。4年前はどんな自分でしたか。少し4年前の自分を思い出し、現在の自分と比べてみてください。いかがでしょうか。きっと外見だけでなく、考え方や知識の幅などといった内面においても、どこか違うのではないのでしょうか。その違いは、皆さんが4年間かけてきた努力の証です。この4年間の努力の証をもとに、これからの社会での活躍を期待します。

棚田 真由美先生

「初めての子かわいい!」といひますが、初等教育学科第一期生の皆さんへの思いもそれに通じるものがあります。4年前、縁があって就実大学に集まってきた学生の皆さんと教員の私。何もかも一から作り上げていくような日々の中で、私自身も皆さんに成長

させてもらったという感謝の気持ちでいっぱいです。就実で得た知識や経験、そして何よりも人とのつながりが、これからの人生の中で皆さんの支えとなってくれることを祈ります。ご卒業おめでとうございます。

原 奈津子先生

ご卒業おめでとうございます。日々の忙しさに埋没しそうになっても、研究心への水やりは忘れないでください。立ち止まって考える時間を大事にしてください。

藤井 貞子先生

卒業してゆく皆さんへ
卒業してゆく皆さんにこれからどんな日々が待ち受けているでしょうか。自ら決めた進路に期待している人や、自分のこれらの立場の厳しさを自覚している人など4年間の思い出とともにそれぞれあることでしょう。2011年元旦は身近な場所で見事な初日の出と、思いがけない大雪に見舞われた地域と大きく分かれしました。この天候の様に皆さんの進路にも様々な状況があることでしょう。どうぞ、どんな場面に出会っても自分自身をあたたく受け止め、それぞれの大切なものを積み重ねて自分らしく生きて下さい。

藤田 知里先生

以下は、映画「ショーシャンクの空に」の中で、主人公アンディが友人レッドへ宛てた手紙の抜粋です。「忘れちゃいけないよ、レッド。希望はいいものだ、たぶんなによりもいいものだ、そして、いいものは決して死なない。」卒業おめでとう!

本田 真美先生

ご卒業おめでとうございます。1期生の卒業をお祝いできることを心よりうれしく思います。大学で学んだこと、感じたことを糧として、勇気をもって新たなことにチャレンジしてください。自分から学ぶ姿勢があれば、いつでも、どこでも、だれからでも学ぶことができます。敬意をもってお互いを認め合い、自分自身の方で生き抜いてくれることを願っています。

宮川 洋子先生

ご卒業おめでとうございます。太陽のような“こころ”を持ち、自分らしさを発揮して、社会に貢献できる人になってください。たとえ、厳しい冬が来たとしても、じっと雪の下で準備していたら、必ず雪が溶けて春がやって来ます。

宗高 弘子先生

ご卒業おめでとうございます。人生は旅に例えられます。どの道にも苦勞がありますが、楽しみもあるはず。健康に留意して、就実での学びを糧に、夢に向かって一歩一歩進んでください。

村田 恵子先生

「未見の我」という言葉を遺した方がいます。たくさんの人と出会い、いろいろな出来事を経験しながら、わたしたちは、日々新しい自分へと変化しています。どんなときも、自分を信じて、しっかり顔を上げて進んでください。応援しています。



卒業生の言葉

初等教育学科4年 三谷 祐巳

私たちは2007年の春、初等教育学科の1期生として就実大学に入学しました。1期生ということで、先輩がいず、学生としても何もかもが手探り状態でした。しかし、友人と協力し合ったり、先生方からアドバイスをいただいたりし、様々なことを乗り越えてきました。不安なことたくさんありましたが、自分たちで初等教育学科の歴史をつくっていくことの楽しさもありました。学生の声で始まった初等教育学科大運動会が、現在でも恒例行事の1つになっていることは、とても嬉しいことです。

私は大学4年間の中で、保育所、幼稚園、小学校での「実習」と「教員採用試験に向けた取り組み」が特に印象に残っています。1年生では学童保育でのインターンシップ、2年生では保育所保育実習と施設実習、3年生では幼稚園教育実習と介護等体験、そして4年生では小学校教育実習、とさまざまな実習を経験させていただきました。小学校教育実習での担当クラスの子どもの「三谷先生の国語の授業で、国語辞典を引くのが楽しかった」、「来年は私たちの担任の先生になって」という言葉を励みに、小学校の教員採用試験を受けました。採用試験対策では、友人と筆記試験の勉強や模擬授業の練習をしたり、先生方に面接練習をしていただいたりしました。試行錯誤しながらの多くの経験や周りの人々の支えがあったからこそ、今の私があり、教員採用試験合格につながったのだと思っています。

4月から小学校の教員として子どもたちの前に立つことに、不安や緊張もあります。しかし、夢だった職業に就き、多くの子どもたちに出会うことができると思うと、期待や喜びも大きいです。大学卒業はゴールではなく、スタートだと思っています。初心を忘れることなく、初等教育学科で培った新しいことに挑戦していく心を糧に、誰からも信頼される教師になれるように努力したいと思います。

初等教育学科一期生として入学して早4年、振り返ればあっという間の4年間でした。本当に多くの思い出があります。まだ皆が浮き足立っていた研修旅行に始まり、長島愛生園にも行きました。保育所や幼稚園、小学校へ実習も行きました。また、後輩たちと運動会も行いました。人によっては、部活やサークル活動に従事した人もいでしょうし、アルバイトに勤しんだ人もいでしょう。各学期末のときは皆で勉強したりもしました。4年になれば、各自採用試験なども受けていき、現実に将来に向けて一歩ずつ進んでいきました。

様々な思い出がある中で、僕の一番の思い出は、様々な授業で行ったグループ活動です。保育士・幼稚園教諭の取得を目指す授業では、音楽や身体表現でグループで一つの作品を作っていくことが何度かありました。それは、1時間の授業の中で作るものもあれば、何週間もかけて作るものもありました。どちらかに限らず、僕はいつも一つのことを意識していました。それは、「どうせやるなら、皆で楽しくなるべく良いものを発表する。」というものです。その時々でやることもグループも違います。互いに意見を出し合いながら、準備を進めていき、練習が必要なものであるなら時間を合わせて練習もしました。この間は、本題以外のことで会話に華が咲き、色んな人とコミュニケーションを取っていくことが何よりも喜びでした。このグループ活動を通して、普段あまり話したこと無かった人とも仲良くなることができました。様々なグループ活動をしました。中でも「幼児の身体表現」の最終活動が一番の思い出です。大きなテーマは提示されましたが、内容から音楽まで皆で相談して考え、発表していきました。時間を合わせて練習をし、簡単な衣装や小道具も用意しました。実際に練習をすると、困難な点も出てきたりしましたが、結果、発表の時は観ている人たちの反応も良く、皆で満足する物ができました。この時は、他のグループも準備に励んでいたため、とても素晴らしい内容でした。この時思ったのは、僕が意識していたことは、実は僕だけでなく、表現などの違いはあっても皆が意識していたのではないかと思います。そのような姿が作品に表れていたと思います。この発表会の時は、初等教育学科に来て良かったと実感したひと時でした。

卒業後は、このようなグループ活動もする機会は無くなります。しかし、今度は子ども達と共にこのような感動を共有することになるでしょう。授業の中で感じたものを大いに生かして、子ども達と共に、たくさんの喜びや感動を味わっていきたいと思います。

講義

幼児の環境 花育

平成22年12月17日(金)2限と3限の「幼児の環境」で初等教育学科の2年生がフラワー・アレンジメントに取り組みました。この授業は保育士と幼稚園教諭を目指す学生が受講しています。今回のフラワー・アレンジメントでは岡山県花き消費拡大実行委員会の協力を受けて、公益社団法人日本フラワーデザイナー協会岡山支部の方々を講師にお迎えして実施しました。授業では、最初に専門のフラワーデザイナーの方から「フラワーデザインの基礎知識を基本テクニック」と題して講話をしていただきました。その後、クリスマスの飾りをテーマとして、フラワー・アレンジメントの制作に取りかかりました。学生たちは慣れない手つきで始めましたが、講師の方のご指導で次第に慣れて、上手に作品を仕上げることができました。卒業後に保育所や幼稚園に勤めた時に、この経験をきつと生かしていくことでしょう。

こんなのができました!



完成した作品



制作に熱心に取り組む

お弁当の日がやって来たー!!

初等教育学科3年 草地 由貴

2010年11月27日に「弁当の日がやってきた～家族と学校と地域の連携～」というテーマで、竹下和男先生にご講演をいただきました。講演が始まる前に、小田和正さんのBGMと一緒に、残りわずかの余命を先刻された母親と、まだ小学校にも上がらない、小さな娘の食に関するエピソードがスライドショーとして流れました。残りわずかの余命を先刻された母親は、自分が死ぬまでに何かを残したいという想いで来る日も来る日も料理を娘に練習させます。すると娘は、母親がいなくなってからも、毎日父親に手紙を添えて晩御飯を作り、それは今でも続いているという内容でした。このスライドショーを見て思わず涙してしまいました。これは私だけではないのでしょうか。

そして、竹下先生の弁当の日のご講演に入りました。学校に弁当の日を作ることによって様々なメリットが生まれますが、一番に竹下先生が食を通して伝えたかった事。それは「家族の絆」ではないかと私なりに解釈しました。両親とも共働きで忙しく、ご飯も冷凍食品や出来合いの食べ物ですませたり、家族揃ってご飯を食べることが難しくなっているのが現代の家庭の現状です。実際に私自身の家庭も、家族ばらばらでご飯を食べるといことは少

なくはありません。たまにはそのような日があっても仕方ありません。

しかし、それが当たり前になってはいないでしょうか。弁当の日には、弁当のおかずを冷凍食品ではなく一から親子一緒になって作る、あるいは作り方を子どもに教えたりすることができます。それを通して、普通に家庭の食卓に並べるご飯もそのようにすることの大切さ、そして、ご飯を家族皆でおいしいといいながら食べることの喜びに気付くことができるのではないかと思います。ここに「家族の絆」が生まれるのです。

今回の竹下先生のご講演を聞き、後に親となり教師となる私にとっても食を通して感じる絆を深く考えるきっかけとなりました。様々な理由や事情はあると思いますが、子どもは大人や親の背中を見て育ちます。まずは否定的な概念をとっぴらって、子どもの立場になって考えてみてください。一週間に一度が無理であるなら、一ヶ月に一度でも良いです。是非、ご飯を親子で作って、それを家族団欒になって食べる日を作ってみてください。「家族の絆」を深めることのできる良い方法の一つではないでしょうか。



実習に行ってきました!!



3年生が幼稚園実習(10日間)に行きました。また2年生も、保育所実習(20日間)、施設実習(10日間)を無事終えました。そして、1年生と2年生数名は教育保育インターシップで、小学校、幼稚園、保育園の現場を経験し、たくさんのことを学ぶことができました。

保育所実習を終えて

初等教育学科2年 片岡 優

20日間の保育所実習は、私にとって毎日が学び、経験、反省の連続でした。指導実習では、絵本を読ませていただく機会や設定保育をする機会をいただき、実践を通して教科書だけでは学べない保育の勉強をすることができました。指導の際には、毎回指導案を作成しましたが、子どもの活動の様子を予想して作成したつもりでも、実際に子どもたちの前で指導してみると、予想することができなかった問題がたくさん見られ、反省点を見つけると同時に自分の観察の甘さに気づくことができました。そして、子どもたち一人ひとりの行動に対して援助を行っていくためには、具体的な目標とねらいをもって保育計画を立てることが重要だということに改めて感じ、今後の学習に向けての更なる課題を見つけることができました。また、毎日実習後に開いていただいた反省会や日々の会話の中でも、先生方にはたくさんの助言やアドバイスをいただきました。そして、活動の流れや指導のポイント、留意点など自分の実習体験と向き合いながら、自身の反省点や今後の課題などを発見し次に繋げることができました。

今回の実習は初めての経験ばかりで、目の前のことをこなすことに精一杯で自分の立てた課題をなかなか達成することができず、問題に直面することも多々ありました。しかし、子どもたちの笑顔や先生方の温かいご指導に支えられて、とても充実した保育実習を終えることができました。そしてなにより、可愛い子どもたちと20日間をともに過ごすことができたことは一生の大切な思い出であり、今後の私の力となりました。今回感じた思いや経験を大切に、今後も目標に向かって日々邁進していきたいと思っています。

インターシップを終えて

初等教育学科2年 都田 修兵

2010年の夏は大変暑かったです。岡山市では、気温が35度をこえる猛暑日が連続12日となり、1990年の連続11日という最高記録を20年ぶり更新しました。

さて、そんななか教育保育インターシップが夏休み中に実施されました。これは、保育園・幼稚園・学童保育・小学校の各施設で「現場」を体験するというものです。私がお世話になった宇野小学校には2年生から5年生まで計18名で5日間のインターシップに行きました。いったいどのような学校だろうか、子どもたちと仲良くなれるだろうか、きちんと仕事をすることができるだろうか、など様々な不安と「現場」を体験できる、子どもたちと遊べるといった期待をもって、小学校に行ったことは今でも覚えています。

最初に「現場」に行き驚いたことは、子どもたちの「元気さ」でした。連日のように外でドッジボールや鬼ごっこをしました。ところが、子どもたちは力いっぱい勉強し、遊んだ次の日には、また前の日のように「元気」に勉強し、遊びまわっていました。正直言って、ついていくのがやっとなという感じが私にははまりました。ですが、疲れていても、子どもたちと挨拶を交わすと自然と自分にも「元気」が湧いてくるのです。実に不思議な感覚でした。子どもたちと一緒に勉強し、遊び、給食を食べ、また勉強するという形だけで見れば非常に単調ですが、内容は常に新鮮で刺激的なものでした。勉強に対する子どもたちの様々な反応、遊びを場面に応じて変化させ楽しんでいること、給食中の楽しそうな会話、どれをとっても私には素晴らしい体験でした。このような充実した5日間はまたたきする間もないくらい、あっという間に過ぎていきました。

そして、お別れの日。子どもたちは手紙を書いて私にくれました。たった5日間でしたが、涙が込み上げてきました。その時ようやく気がきました。自分が子どもたちにしてあげたことよりも、子どもたちが自分に残してくれたものの方がはるかに大きく、意味のあるものであったということに。その思いの受け止め方は人それぞれであったでしょうが、共通する部分も多いことだと思います。

今回のインターシップでは大切なことを一人ひとりが学び、痛感したことだと思います。それを今後の大学生活に反映させ、素晴らしい教師になるべく努力していきたいと思っています。

最後に、この度のインターシップをご支援くださった各学校・園の先生方、およびインターシップに関係されました先生方に感謝したいと思います。

施設実習

初等教育学科2年 日笠 由貴

私は、保育士資格取得のため、10月に10日間泊まりこみでの施設保育実習に参加しました。

実習に行く前は施設的环境に慣れることができるだろうか、又どのような施設なのかと不安でいっぱいでした。実習に行く前、ほとんど障害者とかかわったことがなかったため、障害というものに対して少し抵抗も持っていました。

しかし、実習に行ってみて、利用者とかかわっていくうちに、以前持っていた抵抗感はなくなり、もっと障害を持っている利用者に向き合っていきたいという気持ちが大きくなりました。実習中は利用者とかかわり方や介助方法等多くのことを職員の方から助言して頂き、座学で学んだ以上のことを経験することができました。

今回の実習を通して本当に多くのことを学ぶことができました。中でも、私にとって1番の収穫は、健常者も障害を持った方も1人の人間としてはかわらない、同じということです。1人ひとりライフスタイルがあり、性格も十人十色です。また、それぞれが、その人なりの様々な能力を持っています。しかし、現実には障害のあるなしで線引きをされ、雇用の社会を奪われている人がたくさんいらっしゃいます。せつなく持っている力を発揮できないような社会のあり方に疑問を持つようになりました。10日間という期間はとても短く、施設の利用者の方にとっては日常の一部でしかありませんが、私にとっては貴重な経験になりました。学んだことを大切に、自分に何ができるかを考えながら、勉強を進めていきたいと思っています。

幼稚園実習で学んだこと

初等教育学科3年 板野 真佐子

私は3歳児19名のクラスで実習をしました。1ヶ月間という限られた期間ではありましたが、元気いっぱい子どもたちと過ごす毎日は新しい発見の連続でした。

私はその中でも特に保育者としての子どもとかかわりについて深く考えることができ、目指すべき保育者としての姿を見つけることができたことが実習において最も大きな学びになったと思います。

実習の前半では、子どもとかかわる中で楽しい気持ちを共有したり、褒めたり、認めたりする場面はたくさんありました。しかし、子ども同士でトラブルが起きたときや許されないことをしたときなど子どもと真剣に向き合う場面でのかわりや、実習生である私にはできないだろうと思っていました。しかし、約1年後には私は実習生ではなく、保育者として子どもの前に立ち、真剣に叱ったり、注意したりしなければいけない存在になるという思いもあり、心のどこかでは真剣に向き合わなければならないという気持ちもありました。

実習の後半になると、徐々に子ども1人ひとりの個性が理解できるようになり、真剣に注意すべき場面が自分自身で判断できるようになりました。そこで、伝えるべきことを意識して真剣に伝えると、子どもも真剣に聞き入れてくれるという貴重な体験を何度もすることができました。そこで、「伝えたい」という保育者の気持ちが子どもに伝わるといふ喜びを感じるとともに、子どもと真剣に向き合うことの大切さについて深く考えることができました。

指導においても失敗や反省点がたくさんあり、なかなか自信を持つことができませんでした。しかし、担任の先生が毎日の反省会で細かく指導や助言をしてくださったことで、回数を重ねるごとに自信をもって取り組むことができるようになりました。失敗をしたことに落ち込んだり悩んだりするのではなく、その失敗を今後どのように生かすのか、失敗から何を学び、今後の自分自身の力に変えるかという前向きな姿勢も大切であるということを感じています。

幼稚園実習を通して、子どもに寄り添う保育の難しさや、担任として子どもとかかわることの責任の重さを感じると同時に、今まで以上に子どもとかかわることの魅力を感じました。そして、指導をしてくださった先生のように、どんなときでも子どもと同じ目線で一緒に楽しみ、考え、成長するとともに、子どもの思いに寄り添い、真剣に向き合うことができる保育者になることが私自身の目標になりました。その目標を達成するためにこれからも多くの経験をし、学び続けていきたいと思っています。

「日本理科教育学会に参加して」

初等教育学科4年 宮本 英理佳

2010年11月27日に京都教育大学で行われた、日本理科教育学会近畿支部大会に参加しました。私は「マイクロスケール実験の有効性の検討」というテーマで発表しました。マイクロスケール実験は、2010年1月に、神戸大学附属中等学校の教員の佐藤美子先生に実験方法などを教えていただき、それを元に7月15日に初等教育学科3年生を対象に模擬授業を行いました。それをまとめたものが今回の発表となりました。大会では佐藤先生を始めとする数人の先生方が、マイクロスケール実験についての発表を行いました。そして、その先生方に発表を聞いていただくことができ、そればかりではなく助言をいただいたり、質問に答えていただいたりし、大変有意義な大会でした。特に京都教育大学の芝原寛泰先生は、発表の資料を書く上で先生の論文はとても参考にさせていただいていたため、大会前からお会いできることを楽しみにしていました。その上、何か質問があればいつでも聞いてくれればいいと言って下さいました。また神戸女学院大学の中川徹夫先生も、マイクロスケール実験を小学校で導入する上でのアドバイスをいただき、必要ならば今まで書いた論文を送ると言って下さいました。今では本当に良い経験ができ、大会に参加してみたらどうかと言って下さった秋吉先生に感謝しています。しかし初めて大会に参加するという話を秋吉先生からいただいたときは、とてもうれしかったのですが、まだ卒業論文も書き上がっておらず、たった2年ほどしか研究もしていないため、本当に私が発表してもいいのかと悩みました。発表すると決めてからは、先生方やゼミのみんなに、アドバイスをいただいたり、発表の練習に付き合ってもらったりと多くの人たちに支えられて準備を進めることができました。そのおかげで大会では、自分で納得のいく発表ができたと思いますし、感謝しています。今後はこの大会で学んだことを活かし、卒業論文を書き上げたいと思います。



「おんがくポッケ」

初等教育学科3年 山下 綾香

2010年11月13日、古山ゼミ3年生8名で、参加型音楽イベント「おんがくポッケ」を開催しました。古山ゼミでは、人と音楽との関係や関わりを大きなテーマとしています。そしてさまざまな論文研究を行っている中で、子どもと音楽との関わりや音楽能力の獲得方法について興味を持ち、音楽能力獲得の場を構成し、子どもが実際にどのような反応を見せるのか試してみたいと思い、この活動に取り組むことになりました。

4歳から8歳の子どもを対象として、子どもたちに多様な音楽との関わり方・楽しみ方を提供し、音楽への興味・関心を育むこと、音楽の楽しさ、美しさを実際の演奏を通して体験させることを目的として行いました。この目的を達成するために、音楽をただ聴くだけではなく、実際に楽器に触れ自分で出した音色に耳を傾けたり、演奏方法を学んだり、ほかの人と音楽を合わせる一体感を味わったり、音楽とのさまざまな関わり方を提供できるような内容を構成しました。

子どもが難しいリズムや演奏方法に対して、真剣な顔をしながら、みんなと一緒に合わせようとする懸命な姿や、初めて見る楽器に興味を示し、実際に触り音を出そうとする姿、音が出たときの満足そうな表情などを間近で見ることができました。そしてその中で子どもが自ら学ぶという過程には、私たちの想像をはるかに超えた大きなものがあることに気づきました。年齢によって“できる”“できない”と区別する必要はなく、誰もが自由に音楽と触れ合う機会をもたせることが大切であると感じました。

イベント終了後、参加して下さった保護者の方々ともお話をする機会があり、「子どもたちが本当に自由に楽器に触ることができる場はない。今日は自由に触らせてくれてありがとう」「またこのようなイベントが定期的に行ってほしい」という言葉をいただき、嬉しさと同時に、実際に保護者の方々がこのような場を必要としていることを知りました。

改善点もたくさんありましたが、子どもたちが楽しそうに音楽と関わる姿を見て、私たちが楽しい時間を過ごしました。機会があればまたこのような参加型音楽イベントを開催し、ひとつひとつの活動にねらいや目的をしっかり和明らかにした活動が展開できるような内容にしたいと考えています。



編集後記

『色えんぴつ』編集委員の中心であった07年度生の先輩方とも、いよいよお別れです。といっても『色えんぴつ』の記事探しに、先輩方を訪問させていただくこともあるがもしれません。その節はよろしく願いいたします。末筆ながら、先輩方のご活躍をお祈りいたします。

学生編集委員

3年生 古川雄一、国正耕一郎、
2年生 乙倉里衣、日笠由貴、
東 智子

教員編集委員

竹中伸夫、原奈津子、本田真美、
村田恵子

